書評

松原信之著

朝倉氏と戦国村一乗谷

三上一夫

本書は松原信之氏（県教育研究所研究主事）の著作で、「福井県郷土新書」第四集として、さきほど県郷土誌懇談会から刊行された。

周知のとおり松原氏は、とくに戦国大名朝倉氏の県下切っての研究者であり、これまで『越前朝倉氏と心月寺』（心月寺刊、昭47）の著書はじめ、『県地域史研究』や『若越郷土研究』などの研究誌に、数々の論稿を精力的に発表してきた。このさい従来朝倉興亡史の主要な典拠とされた「朝倉始末記」に徹底的な検証のメスを入れることにより、従来ほぼ定説化されていた数々の事項に対して、手厳しい批判を加え、さらに自ら探索し発掘した信ぴょう度の高い新史料による実証的研究に基づき、きわめて説得力のある

新説を提示している。

たとえば、一乗谷へ移城する以前の朝倉氏は、広景以来孝景まで七代百三十年間、坂井郡三宅黒丸（現、福井市黒丸城町）に居城していたとするのが、従来の定説であったのに対して、むしろ「太平記」の記述にみられる吉田郡旧西藤島村（現、福井市）の「黒丸城」に比定するのが妥当であるとの新説を打ち出している。また北庄から一乗谷への移城、つまり、一乗谷築城の年次につき、従来の定説では、文明三年（一四七一）朝倉孝景による築城に始まるとされているが、これも「朝倉始末記」の記述に従うものではなはだ根拠のないものとした。そして「固山居士拈香」や「朝倉系図」等の史料解釈をふまえ、孝景の祖父教景（美作守）に遡るのが至当であることを指摘した。

さらに朝倉氏の著名な分国法「朝倉孝景条々」についても、従来一般に孝景の時代に成立したものとみられていたのを、条文の内容や、県立図書館所蔵松平文庫の「朝倉家之拾七ヵ条」などにつき検討した結果、孝景当時のものとは考えられず、むしろ孝景の末子、教景宗滴がその大部分を作成したとみるべきだとの推論を下したのである。

このような斬新な研究視角は、すでに全国的に学界で大きな反響を呼んでいるが、これらの松原氏独自の研究成果が、本書では一般の読者層にも容易に理解し得るよう集大成されたものということができる。

また一方において著者が十分配慮したのは、戦国時代に勇名をはせた朝倉氏の複雑な政治的動向のほかに、特異な領国政策や優れた朝倉文化、それに今日の戦国村一乗谷の遺跡発掘による数々の成果をも包合し、朝倉氏興亡の総合的な全体像を生き〳〵と描き出したことである。その点、従来の朝倉氏研究書のなかでは、きわめて精彩を放つものとして大いに注目したいところである。

（福井県郷土誌懇談会刊、二三六ページ、九〇〇円）